

語構成条件から生まれる特殊性

—茶飲料水の商品名「旨茶」を事例として—

内 山 亜 紀*

Novelty Arising from word Formation Conditions
— A Case Study of the Trade Name *Uma-cha* of Bottled Green Tea —

Aki UCHIYAMA*

1. はじめに

商品名は二つの理由から既存にはない語を造る傾向がある。一つは他社商品との差別化、二つ目は商標登録のためである。日常言語と比較した場合、次のような相違点が挙げられる。日常言語の場合、既成にはない語は非文法的だとして認められない。しかし、商品名の場合は非文法的であっても許される。それは私達が日常で使う基本語彙に組み込まれるものではないからである。¹⁾ 例えば、「手」や「机」を表す新しい名称が次々と造り出されたとしたならば、私達の生活は混乱を招くだろう。商品名が日常言語と異なる一番の特徴は、商品の販売を目的とした言語表現だということである。例えば、商品が売れなければ改名されるか、商品とともに消えていく。定着している日常で使われる基本語彙と比べると、商品名はほとんどが定着しない語彙だと言える。

商品名の命名において他社商品との差別化がもっとも重要である。その差別化は多岐にわたっている。一つの商品を多様な観点でとらえて命名をする。例えば、茶飲料水²⁾の商品名の場合では次のような商品名のタイプがある。「生茶」のように既成の語を用いて新しい語を造り出すものや、そして、「伊右衛門」のように比喩を用いたものもある。これらのような既成にはない言語表現を行うことを特殊化と呼ぶことにする。³⁾ そして、他の商品名と差別化させる要素を特殊性と名付ける。

例えば、内山 (2004) において、「生茶」の特殊性を明らかにした。本来茶とは結合しない

*国際関係学研究科 (Graduate School of International Studies)

「生」を結合させたことが「生茶」の特殊化である。特殊性を明らかにするために、生+Yという形態をもつ複合語を調べ、生+Y（液体）の語構成条件を調べた。その結果三つの条件が導き出された。一つはY（液体）が製造過程における最終段階である加熱殺菌をせず、それでも飲用でき、あるいは使用可能な液体。二つ目は、一定の低温で管理されていなければ腐る可能性がある液体。三つ目は、原料（牛の乳から搾ることも含む）からそのまま搾っている液体である。これらの条件の一つ以上をもっている液体は生と結合することができる。茶にはこの三つの条件にあてはまらない。それは、茶葉がすでに加工されているものであり、かつ湯を加えるので、生という状態が起こりえないのである。つまり、生茶の特殊性は、上記の生+Y（液体）の語構成条件の三つの条件と、生という属性をもたない茶によって生み出されている。

本稿では「生茶」のように「X+Y」という複合語における語構成条件によって特殊化を行った商品名を分析する。商品名の場合、既成にはない新しい複合語を造り出す。その際に、既成の複合語がもつ語構成条件に反することによって、特殊化を行う。「X+Y」の語構成においてXの位置を前項、Yの位置を後項と呼ぶことにする。本稿では後項に「茶」という語を置く「X+茶」の語構成の形態を取り上げる。内山（前掲）において、茶の属性にはない語との結合によって生まれる特殊性を明らかにした。

本稿では、茶の属性として認められるものが結合して生まれる特殊性について分析する。分析対象とするのは「旨茶⁴⁾」の語構成の特殊性である。特殊性を明らかにする方法として、語彙体系に定着している既成の複合語の語構成との比較を行っていく。既成の「旨+Y」の複合語の前項となる「ウマ（イ・シ）」の意味分析と後項に位置する「Y」の共通する特徴を考察する。

2. 既成の「ウマ（イ・シ）+Y」の複合語

「旨茶」という複合語は既成の語彙体系にはない。なぜ既成の語彙体系には「旨茶」がないのだろうか。「旨茶」の特殊性を分析するために、語彙体系に定着している既成の「旨+Y」という形態をもつ複合語の意味特徴を見ていく。なお後項のYは名詞に限定する。⁵⁾ 次ページの表（1）は『日本国語大辞典 第二版』（第二巻 2001）に記載されている語である。表記に関しては、「旨（い）」のみではなく、形容詞の語幹で「ウマ」という読みをもつ語を対象とした。

「ウマ+Y」の複合語は7例ある。ただし「うまさ（味酒）」「うまさけ（味酒）」はそれぞれ一つの語としてまとめる。この1例を除くと、6例となる。これらの「ウマ（イ・シ）の語幹」+Yという複合語になる場合の「ウマ（イ・シ）の語幹」の意味について考察する。その結果、次のような意味特徴が導き出される。

(1)『日本国語大辞典 第二版』（第二巻2001）に記載されている「ウマ+Y」

	読み	表記	意味
1	うまいい	味飯	味のよい飯。うまい飯。
2	うまき	味酒	香り高い上等な酒。うまさけ。
3	うまさけ	味酒	一、味の良い酒。上等の酒。美酒。味酒。二、枕詞 ①味の良い酒である神酒(みわ)というところから「みわ(神酒)と同音の地名「三輪」や、三輪山と同義の「三諸(みもろ)」「三室(みむろ)」「神名火(かむなび)」にかかる。うまさけを。うまさけの。②上等の酒の産地であった「鈴鹿(すずか)」などにかかる。
4	うまくち	甘口	①酒、みそ、しょうゆなどの味があまいこと。甘みの多いこと。あまくち。②人のこころをとらえる。うまいことば。③有利な仕事。
5	うまどり	美鳥	美しい鳥
6	うまひと	味人	身分、家柄のよい人。りっぱな人。貴人(きじん)。
7	うまみ	旨味	(形容詞「うまい」の語幹に接尾語「み」の付いたもの) ①食べ物のおいしい味。また、その度合い。②物事の巧みさやおもしろさ。妙味。また、そのものごと。

(2)「ウマ(イ・シ)の語幹」の意味特徴

A 味覚を表す

A-a 甘くて濃い味覚を表わす 「甘口①」

B 評価者が対象Yを標準以上の質を有していると認定していることを表わす

B-a プラス評価

「味飯」「味酒」「美鳥」「味人」「旨味①・②」

B-b プラス評価とともにマイナス評価も加わる「甘口②・③」

※「甘口①」「旨味①・②」「甘口②・③」は表(1)の意味の項目における①～③の説明に対応している。

上記のように大まかに二つの意味特徴にまとめられる。A「味覚を表す」意味とB「評価者が対象Yを標準以上の質を有していると認定していることを表わす」意味がある。A-aの場合は甘くて濃いという味覚そのものを表している。この意味に評価性は加わらない。そして語源の観点から見ると、「甘い」は「味が良い」と捉えられていたののでおいしいという意の「うまい」と同義と推測できる。語源についての詳しい考察は後で行うが、以下先行文献を参照しながら「甘い」と「うまい」の関連を少し述べたい。

石毛直道(1983)では「甘い」という味覚が「うまさ」と結びついているのは、動物的本能が原因だと述べられている。文化が発達していくにつれて、単に甘さだけがうまさを表すよう

ことにはならなくなったようである。また、松本伸子（1983）では美味しさを科学的に分析している。松本によれば「甘味は、栄養的には生存に必要なエネルギー供給源」だと言う。以下、甘味に関する松本の説明を引用する。

甘味の味としての特徴はその嗜好度が高いことであろう。料理の味つけは新鮮な材料ではその持ち味を生かしてさっぱりとし、鮮度がおちたものでは味を濃い目にしてこれをカバーする。砂糖と醤油の甘がらい味付は魚肉、野菜の別なく、いちおう美味しくなるもので調理の素材を生かすも殺すも甘味の使い方次第といえようか

つまり栄養面から見ると、甘味成分は必要不可欠なものであるため「うまい」という評価へとつながったのである。そのため、「甘口①」の意味はもともと「うまさ」をも表していたが、後に味覚の特徴のみが定着したと考えられる。

次に二つ目の意味についてだが、B-aは評価者が対象Yの質が評価基準の高度に達していると認め、プラスの評価を与えることを表わす。「味飯」「旨味①」のように味の評価を表す場合と、「味酒」「美鳥」「味人」のように上等さや美しさ、立派さを評価する意味合いもある。そして「旨味②」の意味の場合は、物事のおもしろさを評価している。これらの評価基準というのは評価者が設定したものであるため、主観的な判断である。

B-bの「甘口②・③」は、評価者が考える基準よりも利点が多すぎる場合でマイナス評価も加わる。②の意味の「人の心をとらえる。うまいことば」とは人の気持ちをとらえる技術の評価しているが、それには裏があるという意味をもつ。③の意味の「有利な仕事」というのも利点が多いことを表すがこれらの意味は「うまい汁を吸う」という慣用句や「うまい話」と同じである。労せずして得をするという意味である。これは、本来何かを得るには苦労をすべきだという規範概念があるからであろう。利点が多くて得だという意味を示しながらも、行動や実質に伴わない利益を得ることは受益者にとってよくないというマイナスの意味を同時に表している。

以上の分析によって、既成の「ウマ（イ・シ）+Y」の複合語における「ウマ（イ・シ）」の意味特徴が三つあることがわかる。「旨茶」の場合は、プラス評価を表すB-aの修飾関係に類似させたと考えられる。

「一飯、一酒、一鳥、一人、一味」は「ウマ（イ・シ）」と結合しているが、「茶」の場合はなぜ結合できないのか。これらの用例の内、「旨茶」と同じ飲料水を表わす語と結合しているのは「味酒」のみである。

B-aの「ウマ（イ・シ）+Y」の場合、現代語の「ウマイ」よりも古語の「ウマシ」との関連が強いと思われる。⁶⁾ 分析を深めるために、次に「ウマシ」の意味分析を行う。

3. 「ウマシ」の意味分析

3.1 「ウマシ」

古語「ウマシ」の意味を『時代別国語大辞典 上代編』(1990)では以下のように述べている。「うまし [味・可美] (形ク) ①うまい。味がよい。②よい。美しい。結構である。この意に用いられるときは、シク活用をした形跡がある。」⁷⁾

さらに、『時代別国語大辞典 上代編』(同掲)にて記載されている「ウマ(シ)+Y(名詞)」の複合語について考察する。以下の三例がある。

(3) 『時代別国語大辞典 上代編』(同掲)にて記載されている「ウマ(シ)+Y(名詞)」

	読み	表記	意味
1	うまさけ	味酒	味の良い酒。良酒。
2	うまさけ	味酒	枕詞。①味酒(ウマサケ)と神酒(ミワ)とが同義であることから、神酒と同音の地名三輪にかかる。②ミムロ・ミモロ・カムナビ・スズカなどの地名にかかる。
3	うまいひ	味飯	味の良い飯

これらの三例は2章で考察した『日本国語大辞典 第二版』(同掲)に記載されている「ウマ+Y」の「味飯(うまいひ)」「味酒(うまさ・うまさけ)」と同じである。「味酒」は単においしい酒を指す場合と枕詞として用いる場合の二通りある。

ここで「ウマシ・ウマイ」の語源について考えてみたい。『語源大辞典』(1988)の記載をまとめると次のようになる。「味がよい。おいしい。ウマはウム(熟)からか。熟した果実の味をいうウムからか。アマイ(甘)と同系か」と述べられている。さらに『日常語語源辞典』(1992)では、次のように説明している。

ウマイ(美しい・甘い・旨い)後世では食物の味のよいこと、技の優れている意に使われる。しかし古く、ウマシはひじょうに広い意味を持った賛美のことばである。『日本書記』や万葉集には、^{うましおとめ}可美少女、^{うましくに}何怜国、^{うましひめ}甘美媛などの漢字を使っている。米をたたえて^{うましね}美稲、酒をたたえて^{うまさけ}美酒といい、おいしくおあがりなさいませというときに「うまらにきこしめせ」という。

ウマシはもともと味覚から出たことばで、さらにひじょうに豊かでととのったもの、りっぱなものをほめる意味を持ったのだと考えられる。同じような古語に「くはし妹」^{いも}「くはし女」などのクワシがある。クワシが繊細で微妙な美しさをいうのにたいして、ウマシは豊かで満ち足りたよさをたたえたことばのようだ。(下線は引用者によるもの)

二つの辞書の記載から、以下のように考えられる。「ウマシ」は「アマイ」または「ウム」から派生し味覚を表す語であった。味覚に対して、良い評価を表していた意味が他の事象にも使われるように広がっていったと推測できる。現代語の「ウマイ」と異なる点は、「賛美」という意味があったことである。現代語の「ウマイ」では「歌がウマイ」というように技術の巧みさを評価する意味合いがあるが、「賛美」するほどの評価ではない。

「アマイ」と「ウマイ」のつながりは2章ですでに述べたように、甘味が人間にとって生存に必要なエネルギーであるため「ウマイ」という評価につながるのは納得できる。それでは、「ウム」はどのような関連があるのだろうか。

『時代別国語大辞典 室町時代編一』(1985)では次のように説明されている。⁸⁾「うむ[熟む](動四) 果物や穀物の実が成熟する。うる。」現代語では「熟れる」は果物にしか用いないが、室町時代では穀物にも使われていたようだ。つまり、「ウマシ」の語幹と結合できる飲食物の条件は「賛美」に値するもので、穀物だと推測できる。その結果「味飯」「味酒」の二例しか存在しないのが納得できる。つまり、「ウマシ」は最上級の評価を表す語で、讀えるのに値する属性をもつもののみにしか付かない。そして酒と飯は米が原料であり、日本人の生活と古代から密着したものである。

「ウマ+Y (飲食物)」となる場合の「ウマ」は古語の「ウマシ」の語幹である。もし現代語の「ウマイ」の語幹ならば、すべての飲食物と結合できたであろう。「ウマ+Y (飲食物)」の語は古代に造られてから、その語構成条件は変化していない。その条件に合わないため、茶は結合しないのである。つまり、「ウマ+Y (飲食物)」の語構成条件は次のようになる。

(4) 「ウマ+Y (飲食物)」の語構成条件

「後項Yに位置する飲食物は、酒や米のように穀物を原料とするかあるいは穀物そのもので、賛美に値する属性をもっているもの」

以上の考察により、茶は酒や飯と比較するとウマシ・ウマを付けるほどの評価を与えられる飲料ではなかったのである。このような語構成条件に反した結合を行うことによって、「旨茶」は特殊化を行っている。

「ウマイ」の語源を分析することによって、「ウマ+Y (飲食物)」の語構成条件を明らかにすることができた。しかし、現段階では辞書の記載からの考察であるので、十分とは言えない。そのため、次節では「ウマ(シ)+Y」の使用例を分析することによって、筆者が考察した「ウマ+Y (飲食物)」の語構成条件が正しいものかどうか実証する。まず、万葉集から取り掛かり、今後時代を追って他の資料を調べていく予定である。万葉集を取り上げるのは、上代の資料の中で読みが明確であり、ある程度まとまった資料だからである。

3.2 万葉集における「ウマ（シ）＋Y」

『萬葉集 新日本古典文学大系 別巻』（2004）において「ウマ（シ）＋Y」の語を抽出したところ以下の11例がある。後項Yは名詞のもののみ抽出する。枕詞として使われている例は、歌全句を載せず、訳も略することにする。囲み線、下線は引用者によるものである。

「味酒」

- (5) 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠るまで 道の隈 い積
もるまでに つばらにも ～以下略 (17)
- (6) 味酒 を三輪の山の祝が齋ふ杉手触れし罪か君に逢ひがたき (712)
- (7) 我が衣色とり染めむ うまさけ 三室の山は黄葉しにけり (1094)
- (8) うまさけ 三輪の社の山照らす秋の黄葉の散らまく惜しも (1517)
- (9) 春されば 花咲きををり 秋づけば 丹のほにもみつ 味酒 を 神奈備山の 帯に
せる 明日香の川の ～以下略 (3266)
- (10) うまさけ の三諸も山に立つ月の見が欲し君が馬の音そする (2512)

「味酒」は6例すべてが枕詞として用いられている。「味酒」は2章の（1）でも記したように、「三輪、三諸、三室、神名火」などに掛かる。枕詞として使用されているため、これらの用例から意味特徴を考察することはできない。しかし、『萬葉集』の時代から枕詞として定着しているということは「ウマ（シ）＋酒」の語構成は結びつきが強いと言える。

「うま人」

- (11) みこも刈る信濃の真弓わが引かば うま人 さびて否と言はむかも (96)
- (12) あさりする漁夫の子どもと人は言へど見るに知らえぬ うまひと の子と (853)

「うまひと」は2章の（1）の『日本国語大辞典 第二版』の抜粋にも記載されているように「りっぱな」という意味合いがあり、身分や家柄のよい人つまり貴人という意味もある。(11)、(12)の例でも「貴人」という意味で用いられている。これは現代語の「ウマイ」には見られない「ウマシ」特有の意味である。

「うまこり」

- (13) 明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし 我が大君 高照らす
日の皇子 いかさまに 思ほしめせか 神風の伊勢の国は 沖つ藻も なみたる波に
塩気のみ かをれる国に **うまこり** あやにともしき 高照らす 日の皇子 (162)
- (14) **うまこり** あやにともしく 鳴る神の 音のみ聞きし み吉野の 真木立つ山ゆ 見
下ろせば川の瀬ごとに ～以下略 (913)

枕詞として用いられている「うまこり」が2例ある。「うまこり」とは『日本うたことば表現辞典⑥－生活編（上巻）』（2000）によれば、「うまきおり」の略で、「美しい織物」という意味を表わし、「あや・あやに」に掛かる詞である。この語は『日本国語大辞典 第二版』（同掲）には記載されていない。

- (15) **味飯** を水に醸みなし我が待ちしかひはさねなし直にしあらねば (3810)

この「味飯」は飯の味覚を評価する「おいしい」という意で使われている。

「うまし」

- (16) 大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は
煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ **うまし** 国そ あきづしま 大和の国は (2)

(16)の用例は複合語となっているものではなく、体言を修飾している「ウマシ」である。万葉集の中で連体修飾となっている「ウマシ」はこの1例のみである。「国」を修飾し、「素晴らしい」という意味で使われている。この歌は天皇が香具山に登って国見をした時に詠ったものである。国見とは「高い山あるいは高殿などから下界を見渡して、その国土の繁栄を予祝儀礼」⁹⁾をすることである。つまり、儀式的時に詠われた歌であるため、この時に用いられた「ウマシ」は単なるプラス評価の意味合いではなく、最上級の評価を表している。この用例によって「ウマシ」に対象を誉め讃える、最上級の評価を表すことが証明できる。

以上、万葉集に出てくる「ウマ+Y」と「ウマシY（連体修飾）」の分析を行った結果、「ウマシ」は「酒、飯、こり（織物）人、国」を修飾することがわかる。3.1において、「ウマ+Y（飲食物）」の語構成条件は「後項Yの飲食物は穀物か穀物を原料とするもので、賛美に値する属性をもっているもの」と設定した。Yが飲食物以外の名詞の場合は、「人、国、織物」のように誉め讃えるのに値すると考えられた名詞のみにしか修飾しないことがわかる。人や国を誉め讃えることは現在でも行われていることだが、「酒、飯、織物」は現在でも賛美に値する属

性をもち続けているとは言えない。賛美に値するという基準は主観的なものであるから、複合語が造られた時代の基準にすぎず普遍的なものではない。

ところで『日常語語源辞典』（1992）における記載では、『日本書紀』や万葉集には、^{うまし}可美^{おとめ}少女・^{うましくに}何怜国・^{うましひめ}甘美媛などの漢字を使っている。」とされている。しかし「^{うましおとめ}可美少女・^{うましひめ}甘美媛」は万葉集では見られない。『日本書紀』も含まれる『日本古典文学大系索引（67-100巻）』（1985）でもこれらの用例は見られない。また、『時代別国語大辞典 上代編』（1990）では「うま[味]」に結合する語として、「—寝，—飯，—綾，—酒，—人，—稻」が挙げられている。万葉集には「味稻（うましね）」は用いられていない。『日本古典文学大系索引（67-100巻）』（同掲）で「美稻（うましね）」という用例が『懷風藻』にあるが、これは人名である。

「^{うましおとめ}可美少女・^{うましひめ}甘美媛」や「^{うましね}美稻」が実際に使われている用例を見つければ、「ウマシ」が「賛美する」という意味をもつことや、「ウマ+Y（飲食物）」の語構成条件が「酒や米のように穀物を原料とするかあるいは穀物で、賛美に値する属性をもっているものに結合することであることの実証性が強まる。今後、これらの用例があるのかどうか調べていきたい。

4. おわりに

「旨茶」の特殊性は、「ウマ（シ）+飲食物を表わす名詞」の語構成条件に反する結合を行ったことによって生まれた。今後は複合語の商品名の類型化を行うために、用例を増やしてどのような特殊性があるのかを考察していく。さらに複合語の語構成について考察する上で、複合語とは何かを考える必要がある。というのは語構成の研究において、複合語の定義が研究者の中で一致していないようである。¹⁰⁾ 商品名の分析を進めながら、複合語及び語構成について考察を深めていきたい。

註

- 1) 商品自体が既成にはない物で、既成の語にそれを表わすものがない場合は商品名が普通名詞として基本語彙に組み込まれる。例えば、ホッチキスやエレクトーンなど。
- 2) 本稿で分析対象とするのは、缶入り・ペットボトルの商品である。そして、メーカー名（商標名）を除いた名称を対象とする。例えば、「サントリー 烏龍茶」の場合、「烏龍茶」のみを対象とする。
- 3) 既成の語をそのまま用いても特殊化できる商品名もある。例えば、茶飲料水が市場に浸透していない1980年代に販売された「サントリー 烏龍茶」がある。「烏龍茶」で缶入りという商品が他社にはなかったので、既成の語を用いだけで特殊化できたのである。商品名の特殊化については市場の状況も含めて考える必要があるが、本稿では言及しない。
- 4) 2002年3月、アサヒ飲料から発売。「ネーミングについては、商品コンセプトである柔らかな旨みとクリアな後味が特長の、全く新しい緑茶であることをストレートにお伝えするために“旨茶”としました。」

(http://www.asahiinryo.co.jp/newsrelease/topics/pick_0093.html)

- 5) 「熟寝（うまい・うまいね）」「旨旨」「旨狂」は分析対象外とした。
- 6) 現代語「ウマイ」については本稿では言及しない。
- 7) 補足として次のようなことが述べられている。「ク活用形容詞の例は①の意に限られているが、その語幹で作る複合語は②の意味になるものもある。シク活用の形容詞が複合名詞の前項になって、ウマ酒・ウマシ国のような二通りの形式をもつ。ウマシ（ク活用）は対象自身に備わる性質。ウマシ（シク活用）は対象に対する主観的な価値評価。」

参考のために、ク活用・シク活用の活用を載せる。

	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ク活用	く・から	く・かり	し	き・かる	けれ	かれ
シク活用	しく・しから	しく・しかり	し	しき・しかる	しけれ	しかれ

「ウマシ（ク活用）は対象自身に備わる性質。ウマシ（シク活用）は対象に対する主観的な価値評価」だとされているが、ウマシ（ク活用）のおいしいという意味も主観的な価値評価ではないのか。活用による意味の相違については今後の課題としたい。

- 8) 『時代別国語大辞典 上代編』（1990）には「ウム」は記載されていない。
- 9) 佐竹明広他（1999）p 14より引用。
- 10) 石井正彦（2005）に詳しく述べられている。

辞書

大岡信監修（2000）『日本うたことば表現辞典⑥—生活編（上巻）』遊子館。
 佐竹明広他編（2004）『萬葉集索引 新日本古典文学大系 別巻』岩波書店。
 上代語辞典編集委員会（1990）『時代別国語大辞典 上代編』三省堂。
 鈴木棠三（1992）『日常語語源辞典』東京堂出版。

日本大辞典刊行会編（2001）『日本国語大辞典 第二版 第二巻』小学館。
堀井令以知（1988）『語源大辞典』三秀舎。
室町時代語辞典編集委員会（1985）『時代別国語大辞典 室町時代編一』三省堂。

引用文献

佐竹明広他（1999）『萬葉集 一 新日本古典文学大系1』岩波書店。
———（2000）『萬葉集 二 新日本古典文学大系2』岩波書店。
———（2002）『萬葉集 三 新日本古典文学大系3』岩波書店。
———（2003）『萬葉集 四 新日本古典文学大系4』岩波書店。
松本仲子（1983）「美味しさの科学」『言語生活』筑摩書房，pp.58-64。

参考文献

赤羽研三（1998）『言葉と意味を考える I』夏目書房。
———（1998）『言葉と意味を考える II』夏目書房。
石井正彦（2005）「語構成研究と連語」『国文学 解釈と鑑賞』890 至文堂，pp.130-140。
石毛直道（1983）「味覚表現語の分析」『言語生活』筑摩書房，pp.14-24。
内山亜紀（2004）「商品名「生茶」の命名から解く逸脱性の生成」『国際人間学フォーラム』1 中部大学国際人間学研究科，pp.15-39。
國廣哲彌（1987）『意味論の方法』大修館書店。
国立国語研究所（1972）『形容詞の意味用法の記述的研究』国立国語研究所。
小島憲之（1964）『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹 日本古典文学大系』岩波書店。
佐藤喜代治編（1987）『講座日本語の語彙 第3巻 古代の語彙』明治書院。
飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版。
武藤彩加（2002）「「おいしい」の新しい意味と用法 — 「うまい」「まずい」と比較して—」『日本語教育』112号 日本語教育学会，pp.25-34。